

セサラハナリ然ルニ近年同僚高田氏幸ニ志ヲ余ニ寄セラレ助クルニ編纂ノコトヲ以テセラレ」云々

『独和兵語辞書』は当時好評で、印刷部数は予定の数倍に上がったが、2年足らずで初版と増補改訂2版を売り尽くしたほどで、第3版（明治33年）まで出た。類書が当時殆どなかったこともあるが、本書がいかに軍関係者に有用であったかを示している。

続いて藤山は単独で『日独兵語会話』（明治33年）を南江堂より上梓した。これは会話力に優れた彼ならではのユニークなものだったが、内容が平易すぎたため却って専門家向きではなくなったことが前著のように売れなかった原因ではあるまいか。

ドイツ式兵学が導入されたのを受けてドイツ兵学書の翻訳が明治20年頃から参謀本部を中心に盛んになった。多くは参謀本部訳とか陸軍大学校訳になっており、具体的訳者名を欠いているが、藤山も翻訳に携わっている可能性が高い。藤山治一訳と明記してあるのは、ドイツの戦術家、戦史家として著名なフォン・デル・ゴルトツ男爵原著 *Kriegsführung* を訳した『交戦及統帥』だけである。上中下3巻から成り、明治39年9月から11月にかけて軍事雑誌社から出版された。クラウゼヴィッツの『戦争論』は難解なことでも有名であるが、その影響を受けた本書も相当に難解である。序文によると翻訳に際して陸大の同僚川上正光と司馬享太郎の助力を受けたという。翻訳の困難性にもかかわらず、それをやり遂げた藤山の功績は大きい。

ところでメッケル少佐は明治21年3月24日、英国船にて帰国の途に就いた。4月船中で中佐に進級した。

帰国後、彼は連隊付になった。次いで大佐に進み、連隊長となり、その後将官でベルリン陸大の教官を勤めた。この間も日本の陸軍将校との付き合いは続いていた。1896年（明治29）6月、メッケル少将は現役を退いた。それから10年後1906年（明治39）7月5日、脳溢血のためベルリン郊外の自邸で死去した。なお、メッケルは日本政府から明治37年5月、我が軍事上に及ぼした功績が顕著であるとの理由で勲一等瑞宝章に叙せられた。

藤山は陸大教官を辞した後、早稲田大学初代ドイツ語教授に就任し、同校ドイツ語科の基礎を作った。この間種々のドイツ語の辞書・学習書・教科書を編纂しドイツ語界のために貢献するところ大であったが、1917年（大正6）5月13日、急性腹膜炎のために急逝した。享年57。墓は青山霊園にある。

幕末維新时期に佐賀藩からは各分野に人材が輩出したが、外国語学者としては藤山治一を第一に挙げるべきであろう。

ドイツ語の達人 池田陽一

周知の如く、明治以降少なくとも昭和の戦前までは日本の医学はドイツの強い影響下にあった。医学関係者の留学先は殆どドイツと決まっていたし、学術論文も英語よりも独語で書かれる場合がずっと多かった。こうした独逸医学全盛の発端は明治初年に遡る。元来江戸時代に栄えたオランダ医学も多くは独逸書の翻訳であった。蘭語を通じて独逸医学を学んでいたわけだ。

明治に入り独逸医学の優秀性が関係者の間で知られるようになって、特に佐賀藩の相良知安の尽力によって、明治新政府も明治3年その採用を決定した。それを受けて翌年二人の医学教師（レオポルト・ミュラーとテオドル・ホフマン）が東校に來任した。その後医学各科のドイツ人教師が次々と來日し教育に当たった。明治10年刊『東京大学医学部一覽』を見ると、教員には11人ものドイツ人がいた。日本人教師もドイツ語で講義する場合が多かった。こうなると医学生にとって独語の知識は不可欠であり、予科ではその習得が最重要視された。結果としてこの頃の東大医学部卒業生には独語が非常に出來た人が少なくない。森鷗外はその一人だったわけだが、後年、福岡と佐賀で産婦人科医として活躍した池田陽一（1858-1937）も知る人ぞ知るドイツ語の達人であった。



池田陽一

池田陽一は安政5年佐賀生まれ。父陽雲と祖父玄瑞は共に鍋島家の御典医を勤めた人であった。明治初年に上京し、司馬凌海の私塾・春風社に入り初めてドイツ語を学んだ。次いで東京外国語学校独語科に入り研鑽を重ねた。『東京外国語学校官員並生徒一覽』（明治7年3月）に「独逸語学下等第六級」として陽一の名がある。時間割によると月曜から土曜まで、毎日5時間ドイツ語の授業があった。文字通りドイツ語漬けであった。後年の独語の達人にはこうした厳しい修業時代があったのだ。その後東京医学校（東京大学医学部の前身）へ入学しドイツ人教師から専門の医学を学んだ。前記『東京大学医学部一覽』では「五等本科生」として陽一の名が見られる。

同級に北里柴三郎がおり、二級上に鷗外がいた。この時下級の「予備第四級生」には入澤達吉がいる。そして明治22年卒業の入澤は、同16年卒業の陽一について後年次のように回想している。

「我輩等から、六七年前頃の東大医学部の卒業生の中には、予科に於ける独逸語の教育が徹底的であったので、独逸語学の能くできる人が少くなかった。就中池田陽一君の如き、山本治郎平君（神戸の開業医一筆者注）の如きは、寄宿舎時代に既に出色であった。通例地方に行って医者をしてゐて、七十歳以上になると、独逸語などは、大抵忘れてしまふものであるが、池田君に於ては全く以て驚嘆の外は無かった。二年前或る事柄に関して同君と度々書状を往復した。種々書くべきことが、多かったので、自然長文になった。然るに池田君からの之に対する返書は、前文に、自分には此方が書き易いから、許して呉れと断はってあり、毫も和臭の無い独逸文で、数頁に亘り、勿論下書などしたものとは見えず、自在に書いてあったには敬服せざるを得なかった。福岡時代から大森治豊君や、大谷周庵君が独逸の医事雑誌に時に報告を出さるゝのは、皆な池田君の執筆さるゝものだと聞いてゐたが、左もありなむ。」（『伽羅山莊隨筆』）

また、福岡の池田病院に奉職した筑紫重臣はこう証言している。「陽一博士は北里、入澤博士等と共に日本医学界の大先輩で、語・読・書共に実際日本語よりドイツ語の方が自在、私の在職四年間ドイツ文は常に書いて居られたが、日本文を草するのを見たことがないといふ人であった。（中略）博士は日本文が書けぬせゐか、幾多の研究業績は殆どドイツ中央産婦人科学界に発表せられ、日本に於けるものは極めて少ない。」（『九州医学専門学校十周年記念誌』）

そのZentralblatt für Gynäkologie (Leipzig) のバックナンバーを調べたところ、1892年

から1901年までに6回寄稿していることが分かった。みな達意の独文で書かれている。

独語達人・池田陽一を生んだのは勿論、本人の素質と努力によるところが大きいですが、受けた教育の影響も大きいと思う。彼は12、3歳頃から私塾でドイツ語を学び、その後も東京外語と東大医学部において徹底した、かつ長期（但し外語時代は短期間）にわたるドイツ語教育を受けた。しかも教師は殆どドイツ人であった。だが明治後期になると、医学志望者も高等学校（旧制）で初めて独語を学ぶようになり、語学力が明治前期の学生に比べて劣るようになるのである。

彼の医学上の功績としては日本に於ける帝王切開術の紹介者として知られ、東大医学部を卒業して2年後、1885年（明治18）福岡医学校（九大医学部の前身）教諭時代に骨盤狭窄の妊婦に帝王切開を行い、しかも母子共に健在であった。それについて自ら語った「元福岡医学校教諭池田陽一博士の追憶談」が『五十年史 九州大学医学部』の巻末に収められている。だが、彼の非凡な語学力に興味がある筆者は、それには全く触れず産婦人科医としての功績だけを述べた『佐賀県の事業と人物』（大正13年刊）の記述には不満である。

亡くなったのは昭和12年10月7日。墓は佐賀市赤松町の龍泰禅寺にある。

長男・一男は父の跡を継ぎ、福岡で産婦人科病院を開業。前記筑紫重臣の語るところでは、彼は病理学の泰斗アショフ博士の下で3年研鑽を積んだだけに、日常診療のすべてが正確なドイツ語で処理されたという。

また三男・池田不二男（1906-1943）は、昭和初期の名歌謡「幌馬車の唄」「並木の雨」「花言葉の唄」「雨に咲く花」等の作曲者である。

谷口長雄のドイツ語修業



谷口長雄

熊本医科大学の前身・私立熊本医学専門学校の校長を務めた谷口長雄（1865-1920）に関する文献では『谷口長雄伝』（谷口長雄先生伝記編纂会、昭和12年）が最も詳しい。同書には谷口のドイツ語学習歴についても触れられているが、簡単すぎる上に誤記もあるので補っておきたい。

谷口長雄は郷里松山で中等教育を終えると、明治13年医学を志して上京した。医を以て名を成すためには先ず東京大学医学部予科に入学する必要があった。その予科の入試科目は国語漢文とドイツ語と数学の3科目であった。当時医学はドイツ医学に範を採っており教育もドイツ語で行われていたので、ドイツ語は特に重視された。

入試では数学もドイツ語で出題された。それで予科に入学する前に私塾等でドイツ語を学ぶのが普通のコースだった。谷口も上京後9月11日に本郷台町の独逸学校（『谷口長雄伝』に独逸語学校とあるのは誤り）に入学し初めてドイツ語を学んだ。この独逸学校は明治11年（1878）に山村一藏によって設立された私立のドイツ語学校で、明治10年